

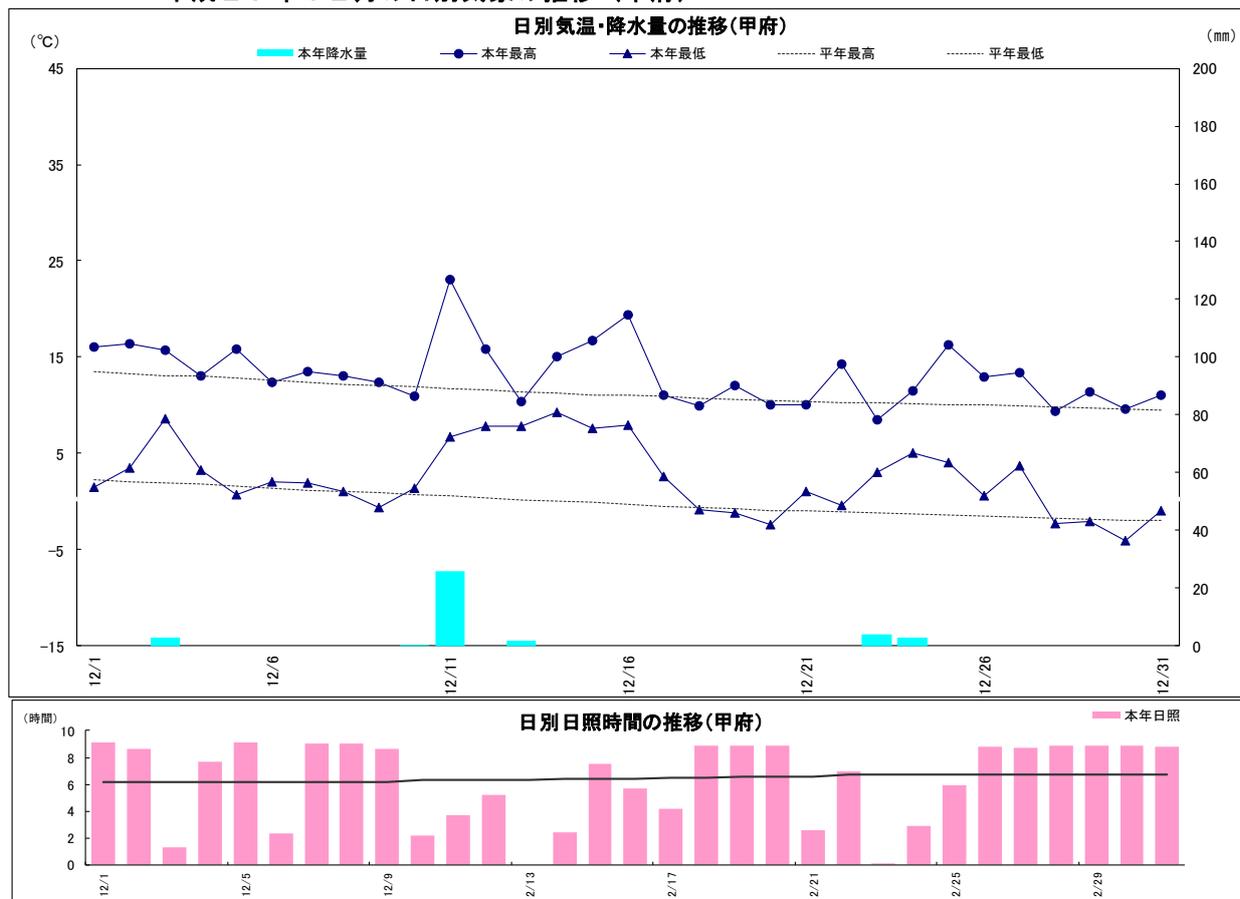
暖冬と乾燥に対する果樹の当面の管理について

平成28年1月5日
果樹技術普及センター

1 気象の推移

平成27年12月12日以降、まとまった降雨がなく、乾燥状態が続いている。また、気温は平年より高く経過している。

平成27年12月の日別気象の推移(甲府)



2 1か月予報 (予報期間1月2日～2月1日:27年12月31日発表)

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

- 平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
- 向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。
- 日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

3 この冬（平成27年～28年）の低温積算の状況

- ・7.2℃以下の低温遭遇積算時間（以下、低温積算時間）状況は、甲府地方気象台で17日程度、果樹試験場で11日程度、前年より遅れている。
- ・そのため、低温の積算状況を確認してから加温開始時期を決定する。

平成28年1月3日24:00まで

調査地点	標高	7.2℃以下の低温積算時間	
		平成27-28年	昨年
甲府地方気象台 (甲府市飯田)	273m	468時間	820時間
果樹試験場内 (山梨市江曾原)	490m	673時間	934時間

- ・低温積算時間については、毎週火曜日を目安に果樹試験場のホームページで公開している
- ・加温開始時期の決定にあたっては最寄りの指導機関に相談する。

4 技術対策

<施設果樹>

(1) 立木

- ・モモ、スモモでは、低温積算時間が1,000時間経過後、オウトウ、ナシでは1,200時間を経過してから加温する。

(2) ブドウ

- ・通常は7.2℃以下の低温積算時間400時間を経過以降に加温するが、登熟が悪く結果母枝が太い場合、樹勢衰弱樹や早期に落葉した園では500時間を経過してから加温する。

※乾燥ぎみに経過しているため、ビニール被覆直後にたっぷりかん水（30mm以上）し、その後も定期的にかん水を行う。

<露地果樹>

乾燥ぎみに経過しているため、日中に凍結層が消えるほ場では、午前中の暖かいうちに樹冠下を中心に20～30mmのかん水を行い、根域の土壌水分の確保を図る。なお、かん水した水がほ場外へ流出しないよう注意する（路面凍結による交通事故防止）。

石灰硫黄合剤や機械油乳剤等の休眠期防除を行う場合、近接に生育の早いウメ等があると飛散により薬害の危険があるため、注意して散布する。

(1) ブドウ

- ・早期落葉樹、若木や欧州系品種では、急な冷え込みによって凍乾害が発生する恐れがあるため、主幹から主枝分岐部へのワラ巻きなどの防寒対策、樹の周囲2 mへの敷きワラによる土壌乾燥対策を徹底する。
- ・結果母枝の登熟不良樹や欧州系品種では、厳寒期を過ぎてから剪定を行う。ただし、雪害対策のため、早めに荒切り剪定を実施しておく。
- ・太枝や側枝を整理する場合は、結果母枝の登熟具合を確認してから行う。
- ・登熟不良樹の剪定では、できるだけ枝数を多くおき、芽数の確保を図る。
- ・枯込み防止のため、大きな切り口にはゆ合剤を塗布する。

(2) モモ

- ・若木では、敷ワラなどにより乾燥防止対策を徹底する。
- ・枯死症対策として、冬季の強剪定を避ける。特に、若木で太枝を剪除する場合は樹液流動後とするとともに、ホゾ切りを活用する。
- ・早期落葉などにより枝の充実が悪い園では、厳寒期を過ぎてから剪定を行う。
- ・枯込み防止のため、大きな切り口にはゆ合剤を塗布する。

5 果樹の雪害対策

(1) 共通

- ・気象情報に注意し、迅速な対応を心がける。

(2) 施設栽培

- ・加温ハウスでは、雪が積もる前から暖房機を稼働させるとともに二重カーテンを開けて融雪に努める。
- ・被覆してある無加温ハウスで発芽前のものは、大雪で積雪が予想される場合、天窗を広く開けるとともに、谷の被覆資材を除去しておく。雪が積もったらできるだけ速やかに除雪する。
また、発芽後のものは、補助暖房装置を活用し融雪に努める。

(3) ブドウ

- ・ブドウ棚等では、支柱による棚の補強を行うとともに、棚面の積雪を減らすため、荒切り剪定をしておく。また、棚面に雪が積もったらできるだけ速やかに除雪する。
- ・雨除けハウスやブドウ棚で防鳥網が除去してない園では、雪害を受けやすいため早急に除去する。

(4) 立木果樹

- ・立木果樹では、主枝・亜主枝等の太枝に支柱を行い補強する。